



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本における『全体新論』医学用語の受容
Author(s)	許, 春艷
Citation	研究論集, 15, 39(右)-49(右)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.r39
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60549
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_009_xu.pdf



日本における『全体新論』医学用語の受容

許 春 艶

要 旨

本稿は漢訳洋書の一つである『全体新論』の医学用語の受容について考察したものである。

『全体新論』は近代中国においてはじめて西洋医学を紹介した生理学入門書であり、イギリスのロンドン会に所属する宣教医ホブソンにより漢文で著され、咸豊元年（一八五一）に出版された。『全体新論』出版後、日本へは嘉永末年（二八五四）ごろに伝わり、安政四年（一八五七）年に翻刻された。明治期に入ると、二種の和訳書である『全体新論訳解』が出版された。

『全体新論』は日本に伝わったあと、当時の知識人に広く学習された。和刻本と和訳書の刊行は幕末明治初期の日本医学に影響を与えた。近年、『全体新論』をめぐる日中医学の語彙交流に関する研究成果が蓄積されたが、『全体新論』に見られる医学用語がどのように受け入れられたのかに関する研究はほとんどなされていない。そこで、本稿は、『全体新論』における「骨」を対象に、二種の『全体新論訳解』と明治初期の医学用語集に受け入れられた状況を考察する。とくに、ホブソンの造語である「坐骨」「蛭蝶骨」に注目し、それらの日本における受容状況を分析する。

はじめに

『全体新論』は近代中国においてはじめて西洋医学を紹介した生理学入門書であり、イギリスのロンドン会に所属する宣教医ホブソンにより漢文で著された^{注1}。同書は咸豊元年（一八五一）に中国の広

州恵愛医館から出版され、中国知識人や中国在住の欧米人、さらに中国の官界と医学界にも高く評価された。『全体新論』出版後、日本へは嘉永末年（一八五四）ごろに伝わり、その翻刻出版は安政四年（二八五七）年に行われた。和刻本『全体新論』は当時の知識人に読まれ、幕末明治初期の日本医学にも影響を与えた。明治期に入ると、

二種の和訳書である『全体新論訳解』が出版された。高木熊三郎訳『全体新論訳解』と石黒厚訳『全体新論訳解』の二種である。

これまで、『全体新論』をめぐる研究は、新しい医学用語が創出した点に着目し、中国語に与えた影響の視点からの考察であった。近年、日中両国の医学語彙交流の観点から『全体新論』を考察する研究も盛んになっている。しかし、『全体新論』が日本に伝わったあと、同書に見られる医学用語がどのように受け入れられたのかに関する研究はほとんどなされていない。そこで、本稿では、日本における『全体新論』の医学用語、主として人身の骨格に関する医学用語を対象に、その受容を検討する。

まず、二種の『全体新論訳解』における『全体新論』の医学用語の受容を考察する。次に、明治五年（一八七二）に出版された、専門的に医学語彙を集めた用語集である『医語類聚』における『全体新論』の医学用語の受容を確認する。さらに、『全体新論』に見られるホブソンの造語に関する日本での受容状況を辞書類で調べる。

一 先行研究

日本における『全体新論』の書誌や医学史上の価値、著者ホブソンについての研究は吉田（一九八九）、吉田（一九九六）、八耳（一九九九）が挙げられる。

吉田（一九八九）によると、幕末期、キリスト教の流入と発展に危機感を抱いた仏僧が著した『閑邪存誠』が出版されたが、そこで

は西洋の科学知識の紹介とキリスト教入信の勧めを兼ねた『全体新論』をはじめとする中国語医学書を批判しているという。また、『全体新論』を中心に論駁するのは当時日本の医学界およびキリスト教の布教に貢献した『全体新論』の歴史的位置を象徴しているとも述べている。

吉田（一九九六）は中国キリスト教初期医療伝道史におけるホブソンの著作とその影響をめぐって、ホブソンの生涯やホブソン五書の構成と内容および特色、さらに中国と日本における反響について詳しく述べている。

八耳（一九九九）の「19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」（以下八耳「目録」と略す）は漢訳洋書の調査に関して詳しい。この「目録」には一九世紀における漢訳洋書及び和刻本の書名、巻数、著者名、出版年などの出版情報と所在情報が記載されている。これによって、『全体新論』の諸版元や和刻本と和訳本に関わる情報を詳細に知ることができる。

従来、『全体新論』に関しては、医学史研究だけでなく、これを言語資料として扱う医学用語研究も行われてきた。

沈（二〇〇〇）は中国における西洋医学用語の発生と中日借用語の視点から、西洋医学の出発点である『泰西人身説概』（一六二三）と『全体新論』の用語を考察している。沈（二〇〇〇）では宣教師らが中国語の医学用語を訳す際に直面した難しさを述べている。また、ホブソンの造語「脳炎、肺炎、肝炎」など、語構成要素「炎」を含む一部のは日本の医学用語に影響を及ぼしたと指摘してい

る。

舒(二〇〇一)は『全体新論』の語彙を『解体新書』と比較し、語彙伝承の面から考察している。両書の語彙に見られる一致は、多くは在来漢語、同じ漢字表記に由来するものの、中国早期の洋学書からの影響によるものもあると指摘している。両書に不明のものは、日本側の医学書からの影響である可能性も言及している。松本(二〇〇六、二〇〇七)はホブソンの医学用語の由来や特色を考察する。松本(二〇〇六)は『全体新論』を『医学英華字釈』と比較し、両書で示された中国語による解剖学的語彙は、あまりにも一貫性、統一性を欠いたものとなつて、中国に西洋学問を浸透させるだけの説得力に欠けるものと指摘している。

『全体新論』をめぐることは、主に近代日中両国の医学史および中国語学的な観点からの研究が行われてきた。そして、中日借用語の研究にも及んでいる。八耳「目録」の収録による各図書館の所蔵状況からみると、『全体新論』が日本で多大な影響を与えたことが推察できる。これまでの研究は『全体新論』において、医学用語の特徴や日本語との関連性を論じたものである。しかし、『全体新論』の医学用語が日本の医学にどんな影響を与えたのか、日本にどのような内容されたのかについての考察はまだ十分ではない。

二 『全体新論』における骨に関する医学用語

『全体新論』は西洋の解剖生理学を紹介したものであり、医学用語

が多数用いられている。ホブソンは当時中国医学において解剖知識の不足や間違いなどに気付き、西洋の新たな医学知識を中国にもたらした。さらにそれに相応しい医学用語を追求し、『全体新論』の医学用語の選用や創出を工夫した。用語について、『全体新論』の例言に次のような説明がある。(括弧に示す解釈は石黒厚訳『全体新論訳解』の例言によるものである。)

・是書全体名目甚多、其爲中土所無者間作以新名、務取名実相符、閱者望毋以生造見棄

(是書全体ノ名目甚ダ多シ。其中土ニ無キ所ノモノハ。間作ルニ新名ヲ以ス。務メテ名実相符ヲ取ル。閲覧望ムラクハ生造ヲ以テ棄テラルルコト母レ)

・是書文意、其与中国医書暗合者、間或引用数語、其不合者不敢混入

(是書文意。其中国ノ医書ト暗合スル者ハ。間或ハ数語ヲ引用ス。其合ハザル者ハ敢テ混入セズ)

このように、ホブソンは『全体新論』に人体に関する名称が多く存在し、そのうち、当時中国に存在しなかった名称をできる限り相応しい新たな名称で命名することを述べている。また、中国の従来の医学書にある既存の名称とその該当する内容と一致したもののみを選び、「数語」を引用したとも述べている。

本節ではホブソンが用いた用語を分析し、その用語の由来や特徴

を分析する。そのため、「く骨」に関する名称を次のような九〇語抽出する。

二字語（三八語）..

脆骨、交骨、頭骨、面骨、額骨、枕骨、顙骨、胸骨、頸骨、脊骨、背骨、腰骨、脇骨、横骨、臂骨、臑骨、手骨、肱骨、掌骨、腕骨、指骨、膀骨、坐骨、髀骨、臑骨、肱骨、踵骨、肘骨、足骨、趾骨、股骨、脚骨、肋骨、頤骨、尾骨、椎骨、砧骨、珠骨

三字語（四三語）..

跨盆骨、顙頂骨、耳門骨、蚨蝶骨（蝴蝶骨）、鎖子骨、馬乳骨、錐顙骨、水泡骨、鼻梁骨、淚管骨、犁頭骨、上膊骨、弔鐘骨、上柱骨、飯匙骨、肩胛骨、上臂骨、下頤骨、正肘骨、軛肘骨、下臂骨、手腕骨、手掌骨、尾骶骨、尾閭骨、大腿骨、太樾骨、大髀骨、膝蓋骨、小腿骨、輔腿骨、勞堂骨、足拗骨、脚跟骨、前掌骨、大趾骨、目窠骨、小珠骨、馬鐙骨、螺旋紋骨、眼窠骨、牙床骨、右膀骨

四字語（九語）..

上水泡骨、下牙床骨、鼻孔間骨、鼻孔底骨、上牙床骨、水泡上骨、下水泡骨、眼稜上骨、眼稜下骨

抽出したこれらの語彙がホブソンによる造語であるかどうかについて、『大漢和辞典』、『漢語大詞典』や中国の医学書を調べてみた。

『大漢和辞典』と『漢語大詞典』に記載している典拠より、『全体新論』より前の書籍に既に存在している語彙は次の通りである。

『大漢和辞典』

二字語（七語）.. 脆骨、額骨、顙骨、脊骨、臑骨、肱骨、尾骨

『漢語大詞典』

二字語（一三語）.. 脆骨、頭骨、面骨、枕骨、顙骨、脊骨、腰骨、

腕骨、膀骨、髀骨、臑骨、肋骨、尾骨

三字語（四語）.. 鎖子骨、鼻梁骨、膝蓋骨、肩胛骨

中国医学書では『医宗金鑑』に次の用語がある^{注二}。

二字語（二六語）.. 脆骨、交骨、頭骨、額骨、枕骨、顙骨、胸骨、

頸骨、脊骨、背骨、腰骨、横骨、臂骨、臑骨、

掌骨、腕骨、指骨、膀骨、髀骨、臑骨、肱骨、

肘骨、足骨、趾骨、肋骨、尾骨

三字語（一二語）.. 耳門骨、鎖子骨、鼻梁骨、膝蓋骨、肩胛骨、

大腿骨、太樾骨、尾骶骨、尾閭骨、小腿骨、

勞堂骨、牙床骨

四字語（一語）.. 下牙床骨

以上の資料を調査した結果をまとめると、次の用語が既存の語であることがわかった。

二字語（二八語）…腕骨、交骨、頭骨、面骨、額骨、枕骨、額骨、
胸骨、頸骨、脊骨、背骨、腰骨、横骨、臂骨、
臑骨、掌骨、腕骨、指骨、膀骨、髀骨、臑骨、
肱骨、足骨、股骨、肋骨、尾骨、肘骨、趾骨
三字語（一二語）…耳門骨、鎖子骨、鼻梁骨、膝蓋骨、肩胛骨、
大腿骨、太腿骨、尾骶骨、尾閭骨、小腿骨、
勞堂骨、牙床骨
四字語（一語）…下牙床骨

二字語について、ホブソンは既存の用語を大量に採用し、漢方（中国医学）の伝統を尊重していることがわかった。一方、二字語にはホブソン自らによる造語がわずかにあるが、三字語以上を見ると、既存の二字語を基礎にし、三字語と四字語を大量に創出したことはホブソン造語の特色の一つであると言える。

典拠不明の用語は「坐骨、蛭蝶骨、犁頭骨、上臂骨」の四語であり、これらはホブソンの造語である可能性が高いと考えられる。中国医学には寛骨の後下部を占め、閉鎖孔を囲む部位の骨については独立した名称がなかったため、ホブソンは「此骨乗於椅上故名坐骨」というように、この骨に関してホブソンの『医学英華字釈』にある'sitting bone'を「坐骨」と直訳し命名している。「蛭蝶骨」という名称の下に割注「中土無名故云」とあり、すなわち、中国にこの骨の名前は存在していなかったことを示している。ホブソンはこの骨の名称を創出する前に、中国語に既に名前があるかどうかまず確認し

ており、中国の伝統的な用語を重んじたと思われる。「犁頭骨」という訳名は本文に「西国名之曰々、像其形也」のようにこの骨の名前の由来を述べる。「犁頭骨」は『医学英華字釈』により、英語「the vomer」の訳語であることがわかり、現在「鋤骨」という。「上臂骨」をホブソンの造語と判断するのは「古名臑骨又名肱骨」のようにひじの旧名である「臑骨」と「肱骨」を載せていることによる。ここから見ると、ホブソンは中国語の医学伝統を重んじる一方、理解しやすい通俗的な用語を作り出して伝統医学の用語に局限されないように工夫していたと言えるであろう。

上記のように、ホブソンは『全体新論』を執筆する際に、骨に関する名称を既存の語から用いることを基本としたが、中国の伝統医学にないものについては自ら語を作った。二字語については既存の語から多く採用したが、三字語以上の語は既存の二字語を土台にして創出したものもある。また、西洋医学用語から直訳する訳法を用いた。ただし、「上臂骨」のような典拠不明の用語は既存の語であるのか、ホブソンによる造語なのか、更なる資料を調べる必要がある。

三 『全体新論訳解』における『全体新論』の医学用語の受容

前節は主に『全体新論』の医学用語について考察したが、本節では二種の『全体新論訳解』における『全体新論』の医学用語の受容状況を考察する。

(一) 『全体新論訳解』について

前述のように、『全体新論訳解』は漢文医学書『全体新論』の和訳書であり、二種のものが知られている。明治六年（一八七三）から明治七年（一八七四）にかけて大阪で出版された高木熊三郎によるもの（以下高木『訳解』と略す）と、明治七年（一八七四）に名古屋で出版された石黒厚によるもの（以下石黒『訳解』と略す）である。

『全体新論訳解』に関する研究は飛田（一九七三）が挙げられる。飛田（一九七三）は近代語研究上の資料を概観したもので、翻訳資料の一つとして『全体新論訳解』を挙げ、次のように述べている。

中国に渡った欧米の宣教師が漢訳した医学書「全体新論」の

翻訳に「全体新論訳解」（明治七年）があるが、これは

男骨^{ナンコツ} ハ堅クシテ稍ク長シ（巻一4ウ）
フツコノボネ

男女渾身ノ骨其ノ数タル相埒ク似タリ（同前）
ナンニヨコシン カラダウチ

のように、難解かと思われる漢語にふりがながあり、右側は読み方、左側は意味（訳語）を示している

飛田（一九七三）では『全体新論訳解』がどちらのものであるかについて言及されていない。ここでは、二種の『全体新論訳解』を比較し、高木『訳解』と判断する。

飛田（一九七三）が高木『訳解』を扱った以外は、二種の『全体

新論訳解』に関する言及はほとんど取り上げられていない。二種の『全体新論訳解』を言語資料とする研究はまだ十分でないと思われる。

(二) 『全体新論訳解』二種における医学用語

二種の『全体新論訳解』は『全体新論』を「訳解」したものである。石黒『訳解』は漢文訓読体であり、高木『訳解』は漢文訓読調の翻訳であるため、文体の違いにより語彙の翻訳も異なる。前掲の抽出した語彙を両書の翻訳と比較すると、各書の違いが見られる。

石黒『訳解』において、医学用語の漢字表記はほとんど『全体新論』と一致し、そのまま訳されている。例外として、「鼻孔間骨」について、初めは「鼻孔ノ間骨」のように句の形で訳されているが、その後は「鼻孔間骨」のように訳されている。和刻本『全体新論』における「鼻孔間骨」を確認した結果、「鼻―孔間―骨」と「鼻―孔―間―骨」といったように相違する合符が現れている。この合符の違いにより二種の訳語が訳されられると思われる。また、前掲の九〇語のうち、六〇語に振り仮名が一つのみ付され、四語に左右両側の振り仮名が付されている。

これに対し、高木『訳解』においては、九〇語に対する翻訳が複雑な形を呈している。はじめに訳された医学用語の表記から見よう。二字語の「脆骨」は「脆骨」と「脆キ骨」との二種に訳されている。それ以外の二字医学用語はそのまま訳されている。三字語については、「上柱骨」を「上ノ柱骨」に、「尾骶骨」を「尾骶ノ骨」に訳さ

れている。四字語において、「鼻孔間骨」ははじめに「鼻孔ノ間ノ骨」とあり、その後に見れるものはそのまま「鼻孔間骨」と訳されている。「鼻孔底骨」が「鼻孔ノ底骨」のように訳されたのは四語ある。要するに、高木『訳解』における三字語以上の訳語は「ノ」で二つ以上の語を繋ぐ形にするものが多い。一方、高木『訳解』の医学用語は振り仮名が多く付され、しかもそれらが多様であるという特色がある。次のような例を見よう^(注三)。

(1) 振り仮名が一对一 (五〇例)

①音読み (二五例) … 交骨 (コウコツ)、踵骨 (ソウコツ)、坐骨 (ザコツ)

②訓読み (二二例) … 脊骨 (セボネ)、股骨 (モモノ〇)、肘骨 (ヒヂボネ)

③音訓組み合わせ (三例) … 犁頭骨 (リトウノ〇)^(注四)、上牙床骨 (ウヘノハノダイノボネ)

(2) 振り仮名が二つ以上現れるもの (二二例) … 頸骨 (クビノ〇) (ケフコツ)、上臂骨 (ウハヒヂノ〇) (ウヘノヒヂノ〇)、脇骨 (スヂボネ) (ワキボネ)

(3) 左右振り仮名およびそのどちらか現れるもの (八例) … 額骨 (ガク〇・ヒタヘ) ↓ (ガクコツ) / (ヒタエ)、枕骨 (チン〇・マクラ〇) ↓ (マクラボネ) / (チンコツ)

以上の振り仮名から見ると、高木『訳解』にも一部の振り仮名が

「ノ」で繋ぐ医学用語がある。これらの医学用語を除き、全般的に見ると、高木『訳解』の医学用語は術語としての要素を備える。これらの用語の振り仮名を見ると、(1) 振り仮名が一对一の「音読み」と、「訓読み」の一部は形だけではなく、音と義ともに術語の要素を備える。一方、「ノ」で繋ぐ用語は一つの漢字表記語という形があっても、振り仮名で反映する音と義から判断すれば、厳密に一つの術語としては認められないだろう。

石黒『訳解』と高木『訳解』とを比較してみると、石黒『訳解』は漢文訓読体であるため、訳語はできる限り漢文の原本と一致する形をとる。句ではなく、一つの語として訳すのは医学用語の翻訳に相応しいと思われるが、漢文に詳しくない読者にとっては理解しにくいものである。一方、高木『訳解』は漢文訓読調の翻訳と言っても、漢文訓読の訓法から完全に離れたとは言えない。上記の学術用語の翻訳から見ると、形は原本と同じであるが、多様な振り仮名によって、医学専門書としての難解さを緩和し、解剖学の初心者向けの翻訳書を想定してこれらの作業を行ったと言えるだろう。

四 『医語類聚』における『全体新論』の医学用語の受容

明治初期の日本では、オランダ医学が退潮期を迎え、主流は英米医学になった。英米医学の発展に従い、医学生を養成するための教科書や医学用語集が必要となった。このことを背景に、専門的に医

学語彙を集めた英和医語辞典である『医語類聚』が明治五年（一八七二）に名山閣から出版された^{注五}。『医語類聚』は海軍軍医である奥山虎章がダングリソン（一七九八—一八六九）の『医学事典』を典拠に編纂し、解剖学、生理学、薬物学などの術語を内容としたものである。同書は初版から五年後に増訂第二版が出版された。『医語類聚』は蘭学や漢訳洋書などの医学用語を吸収する際に新しい医学用語を作りだした。その訳語は現在の医学用語に多大な影響を与えた。例えば、『日本国語大辞典』（第二版）（以下『日国』と略す）には『医語類聚』から約七八〇例が引用されている。そのうち、約五五〇例が『医語類聚』が初出例として収録されている。

『医語類聚』の訳語はホブソンの造語から影響を与えられている。例としては『医語類聚』がホブソンの「〜炎」に関する造語に基づき、数多く訳語を創出したことである。ホブソンが英語の “inflammation” を「炎症」と訳し、初めて『西医略論』に「西国方言曰炎法美順、訳爲炎熱之意、故名曰炎症」のように用いられた。「炎法美順」は “inflammation” の音訳である。ホブソンの『医学英華字釈』に「〜炎」という用語は約二〇語あるが、『医語類聚』には「〜炎」に関する訳語が約一六〇語にのぼる。

さらにホブソンの代表的な医学書である『全体新論』も『医語類聚』の訳語に影響を及ぼした。『全体新論』にある骨に関する名称が『医語類聚』のものとは一致しているのは「坐骨、肩胛骨、膝蓋骨、趾骨、指骨、砧骨、馬鐙骨、顛頂骨、軀肘骨、蚌蝶骨、尾骶骨、頭骨、正肘骨、額骨、枕骨」である。「坐骨、蚌蝶骨」の二語は『全体新論』

から直接受け入れられた訳語であると考えられる。「砧骨、馬鐙骨、顛頂骨、軀肘骨、正肘骨」の五語はホブソンの造語であるかどうかまだ不明であるが、『医語類聚』は『全体新論』の影響を受けた可能性もある。そこで、『全体新論』より先に日本に流入した中国医学書、とくに漢訳洋書を確認する必要がある。また、骨に関する訳語はわずかであるが、これから『医語類聚』の訳語と比較するため、『全体新論』の医学用語を全般的に調査することとする。

五 『全体新論』の医学用語の日本での受容

『全体新論』は日本に伝来し、医学書として広く学習された。したがって、ホブソンの造語が日本でどのように受け入れられたのかについて分析する。

ホブソンの造語「坐骨」は現在の医学用語ではそのまま「坐骨」である。一方「蚌蝶骨」は『全体新論』に「蚌蝶骨」と「蝴蝶骨」の両方の表記があるが、「胡蝶骨」に当たるものであり、現在の医学用語で言えば「蝶形骨」に相当する。『日国』には「坐骨」「胡蝶骨」の両方が収録されている。

まず、「坐骨」の記述は次のようになっている。

坐骨（名）（椅子に腰をおろしたとき、椅子の面に接する骨の意から）腰部にある寛骨の下半部を占める骨。坐骨体と坐骨枝に分かれ、腸骨・恥骨と癒合（ゆごう）して寛骨をつくる。

* 医語類聚〔1872〕〈奥山虎章〉「Schiaticus 坐骨ノ」

* 生物学語彙〔1884〕〈岩川友太郎〉「Ischium 坐骨〔解〕」

「坐骨」は医語用語集の『医語類聚』に収録され、その後、『改訂医科全書』の「第四号解剖篇下肢骨論之部」（東京大学医学部編、一八七八年出版）といった医学解剖書に使われ、『生物学語彙』のような用語集にも収録されている。「坐骨」は医学関係の用語として広く使われ、『和英語林集成』（第三版）（一八八六年）にも収録され、一八八九年に出版された『言海』にも収録される。その後、『日本大辞書』、『帝国大辞典』、『日本新辞林』などの国語辞書にも収録されるようになった。続いて大正期の『大日本国語辞典』に収録され、その後、中型の国語辞書『広辞苑』の初版（一九五五年）からの版本を始め、小型の『岩波国語辞典』（一九六三年）まで収録された。「坐骨」はほとんどの国語辞書に収録されている。現在の日常生活では「坐骨」が使われ、身体部位の一つとしてよく知られる言葉である。このように、「坐骨」は初め医学用語として使われたが、次第に一般語としてよく知られ、広く用いられるようになった。

次に「蛭蝶骨」の受容状況を見よう。「蛭蝶骨」「蝴蝶骨」の表記は『日国』に収録されていないが、「胡蝶骨」は『日国』に「蝶形骨に同じ」と記述されており、用例は記載されていない。『医語類聚』には「蛭蝶骨」は訳語として収録されていないが、「Schindylesis 不動関節ノ一種（錘骨ト蛭蝶骨ノ類）」という用語の注に「蛭蝶骨」がある。『改訂医科全書』の「第五ノ上解剖篇頭骨論之部」（東京大学

許 日本における『全体新論』医学用語の受容

医学部編、一八七九年出版）には「蝴蝶骨」が用いられる^{注6}。ほかの資料には「蛭蝶骨」「蝴蝶骨」の表記が少ない。さらに、「胡蝶骨」は「坐骨」と違い、『和英語林集成』および『言海』のような明治期や大正期の国語辞書にも収録されていない。ただし、『広辞苑』の初版（一九五五年）から第六版まで「胡蝶」の項目に「胡蝶骨」が収録されている。『大辞林』の初版（一九八八年）にはないが、第二版の「胡蝶」の項目には「胡蝶骨」が収録される。『広辞苑』と『大辞林』には「胡蝶骨」についてはほぼ「蝶形骨に同じ」のような記述であり、『日国』と一致している。このように、「胡蝶骨」は現在ほとんど使われていない状況である。「胡蝶骨」は頭蓋骨の一部であり、医療従事者をもっぱら用いるものとして、一般の人々は日常生活で触れない用語なので、一般用語として広がらなかったと思われる。このため、明治期に専門用語として使われたが、明治期の国語辞書に「胡蝶骨」は収録されていない。

以上、『全体新論』の造語である「坐骨」と「蛭蝶骨」に関する日本での受容状況について辞書類の収録状況から考察した。「坐骨」「胡蝶骨」のような医学用語は直接明治初期の日本医学に受け入れられたことがわかり、『全体新論』は医学の訳語の創出に影響を与えたと見える。一方、「犁頭骨」のような用語は『医語類聚』に訳語として受け入れられていない。「犁頭骨」が対応する英語‘vomer’は『医語類聚』で「鋤骨」と訳されている。「鋤骨」について、「犁頭」に近い意味の言葉の「鋤」に直されたのか、『医語類聚』の自らの造語であるのか、現時点で手元にある資料は限られているため、この問題

に答えることは難しい。これから、この問題についてさらに資料を収集した上で、解明をしたいと思います。

終わりに

『全体新論』は漢訳洋書の一つとして日本に伝わり、日本の知識人に広く読まれ、翻刻や翻訳がされるようになった。日本では『全体新論』の医学知識が吸収されるだけでなく、医学用語も取り入れられる。

医学用語の翻訳について、二種の『全体新論訳解』は文体の違いにより翻訳方法が異なる。石黒『訳解』はできる限り原本を忠実に訳すが、高木『訳解』は単一の訳法に限らず、訳語が多様な形を呈している。両書における翻訳の相違は付される振り仮名の比較から見られる。

明治初期の医学用語集『医語類聚』に収録される医学用語は『全体新論』の影響を受けた。『医語類聚』はホブソンの造語をいくつか直接受け入れた。また、この医学用語集に収録される『全体新論』の医学用語が次第にほかの辞書類にも収録されるようになった。例として、「坐骨」と「胡蝶骨」の受容状況を『医語類聚』とその後の辞書類の中で確認できた。

今後、『全体新論』の医学用語について更なる資料の調査を通して「骨」以外の語彙を網羅的に分析し、その受容を考察したい。その一方で、中国の文献を調査し、中国におけるその受容状況を考察し

たい。さらに、日中の語彙交流の面から「坐骨」や「坐骨神経痛」などの語彙の相互影響や交流に関して、調査する必要があると考えている。

(きよ しゅんえん・言語文学専攻)

注

(注一)『全体新論』の著者ホブソンは一八一六年イギリスのウェルフォード(Welford)に生まれ、一八三九年より約二十年間、中国で医学活動を展開した。氏は一八四八年に広東の西郊に恵愛医館を開き、一八七三年にロンドン郊外で死去した。著書には『全体新論』『博物新編』『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』の五書があり、これはホブソン五書或いは西医五書と称される。一八五八年、ホブソンは自著で用いた術語を整理し、『医学英華字釈』の医学用語集を出版した。

(注二)『医宗金鑑』は清の乾隆帝の命令のもと、呉謙らによって纂修され、乾隆七年(一七四二)に刊行された中国の伝統医学全書である。全九〇巻。歴代諸家の説を整理したものである。発刊当時から現在に至るまで中国の臨床医学に最も重要な医学書の一つとして利用され続けている。

(注三)「ガク〇・ヒタへ」のように、「〇」は該当の漢字の振り仮名が存在していないことを表す。「・ヒタへ」は左側振り仮名を表す。特に表記していないものは右側振り仮名である。

(注四)型頭骨(リトウノ〇)について、振り仮名が付されていない「骨」を「ホネ」と推測する。理由として、高木『訳解』に現れる「ノ骨」は「ノホネ」と振り仮名が付される例があるが、「ノコツ」と付される例がないことから推測する。

〔註五〕『医語類聚』については、森岡健二編『明治期専門術語集Ⅰ医語類聚』を参照した。

〔註六〕前掲の『改訂医科全書』と『生理学語彙』については、国立国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されているものを参照した。

参考文献

許春艶（二〇一四）『二種の『全体新論』の語彙について——『全体新論』の語彙』『研究論集』一四 北海道

大学大学院文学研究科

舒志田（二〇〇一）『『全体新論』の語彙について——『解体新書』の語彙と比較しながら——』『国語学会二〇〇一年度秋季大会要旨集』

沈国威（二〇〇〇）『泰西人身説概』（1623）から『全体新論』（1861）まで——西洋医学用語の成立について——』『関西大学中国文学会紀要』二

一 関西大学中国文学会

飛田良文（一九七三）『近代語研究の資料』『季刊文学・語学』六六 三省堂

深瀬泰旦（一九九六）『『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章』『日本医史学雑誌』四二（一） 日本医史学会

深瀬泰旦（一九九六）『『医語類聚』（奥山虎章）と Medical Lexicon (Robley Dunglison)』『日本医史学雑誌』四二（一） 日本医史学会

深瀬泰旦（一九九七）『ロブリー・ダングリソンの『医学事典』——明治初年のわが国英米医学への貢献——』『日本医史学雑誌』四三（四） 日本医史学会

松本秀士（二〇〇六）『ホブソン（合信）にみる解剖学的語彙について』『或問』一一 近代東西言語文化接触研究会

松本秀士（二〇〇七）『ポストホブソンの中国文西洋医学書』『或問』一三 近代東西言語文化接触研究会

八耳俊文（一九九九）『19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録』『六合叢談』（1867～58）の学際的研究』白帝社

許 日本における『全体新論』医学用語の受容

吉田寅（一九八九）『中国語キリスト教書の流入と仏教界の対応——幕末・明治初年を中心として——』『仏教史学研究』三二（二） 仏教史学会
吉田寅（一九九六）『中国キリスト教初期医療伝道史研究——ホブソン著中国語医学書の一考察——』『立正大学文学部研究紀要』一二 立正大学文学部